

第13章 兵庫県B小学校 - 学校評価システムを主軸とした学校改革 -

B小学校は、平成12年度に今の校長が就任して以来、学校評価システムを主軸にした学校改革を進めてきた。この学校の特色ある取り組みは、学校改善計画の実施、内部組織の運営方法の改変、「一人1研究」の推進、学校評価システムの導入、学校の情報誌の発行、複眼的評価を取り入れた通知票の導入、地域・保護者との連携による学校づくりである。これらの改革を成功に導いた要因として、見本となる教員の存在、学校を保護者・地域に開いたこと、「子どもの育ち」を最優先する校長の教育理念の浸透が考えられた。

1. 調査の方法

(1) 調査時期及び調査方法

1) 平成16年9月2日

学校評価を積極的に取り入れている小学校として評価が高いことから、予備調査として学校を訪問し、校長に学校評価を中心に自校が取り組んでいる教育改善について2時間ほどインタビューを行った。

2) 平成16年10月19日

調査校選定後、本調査として学校を訪問し、校長に、学校の基本特性、教育目標・教育課程、学校内部組織と運営方法、運営管理、教員委員会との関係、保護者・地域との関係、学校評価などの学校改善に向けての特色ある取り組みについて2時間ほどインタビューを行った。

3) 平成16年11月25日

この学校が主催する授業研究発表会の様子を2時間ほど参観した。

4) 平成17年1月18日

平成16年度の重点課題に挙げられている教科の基礎基本の徹底や分かる授業の推進、新学習システム、特別支援教育への対応について1時間ほどインタビューを行った。

(2) 収集資料

『平成16年度 学校概要』

『2004年度A市立B小学校 教育課程編成に関する関連文書等』

『A市教育委員会指定 2001年度「総合的な学習の時間」実践交流会 研究のあゆみ「人とつながり、自分のあり方を見つめる子どもをめざして」』

『かがやけ! ビーミーっ子』第6号、第7号

『平成16年度A市教育委員会指定 第9回B小学校研究発表会 資料「自己見取り力を育てる評価活動事例集」』

『平成16年度A市教育委員会指定 第9回B小学校研究発表会 指導案集』

『兵庫教育大学大学院講義資料('05.1.18)』

2. 学校の概要

(1) 学校の基本特性

B小学校は、ニュータウンの中心地に市内最後の新設校として平成7年度に創設された大規模校である。現在の児童数は987名で、市内の児童数の1割強に相当する。

教員数は、20代が5名、30代が11名、40代が9名、50代が10名である。教員の平均年齢は40.2歳で、その男女比は35:65である。市内では比較的50代が多い学校である。

学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	チャレンジ		合計	
児 童 数	男	72	69	81	100	81	113	1	3	520
	女	64	76	66	83	85	93	0	0	467
	計	136	145	147	183	166	206	1	3	987
学級数	4	4	4	5	5	6	1	1	30	

(2) 学校の教育目標

この学校では、「人間尊重の精神を基盤として、個性を生かし、自ら学び続けようとする意欲と方法を身につけさせるとともに、共に生き、共に伸びようとする心豊かな人間の育成を目指して」以下のような教育目標を定めている（収集資料）。

<p>1. やさしく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然を愛し、人を愛し、ふるさとを愛して、生きることに喜びをもつ子に育てる。 ・広くおおらかな心を持ち、自らを大切にすると共に、他人の個性や特徴を認め、共に生きようとする態度を育てる。 <p>2. かしこく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら学び続ける意欲と集中力、忍耐力を育てる。 ・基礎・基本を確実に身につけ、自らの課題に意欲的、創造的に取り組む子を育てる。 <p>3. たくましく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心身共に健康で、強い意志を持ち、責任を持って実践する子を育てる。 ・試練をバネに変え、自らの未来をたくましくきり拓く子を育てる。

(3) めざす学校の姿

上記の教育目標を実現する学校のあるべき姿を以下のように描いている（収集資料）。

『笑顔いっぱい 歌声いっぱい 花いっぱい 地域の風が行き交う学校』

- ・活気あふれる学校 ~学ぶ喜びと希望につつまれ、やる気いっぱいに~
- ・美しい学校 ~花・絵画・詩に囲まれ、心にも花を~
- ・ふれあいにあふれた学校 ~人の気持ちがわかり、助け合い、励まし合う子ども~
- ・ふるさととしての学校 ~地域とかがわるみんなの学校

(4) 学校経営の方針

学校の経営方針として、「みんなでつくる夢ある学校」を目指している。この学校は「ピーミーの丘」というニックネームで地域からも親しまれている。この「ピーミー」は、英語で「光り輝く」という意味であり、「生き生きと光り輝く子どもたち」が集まる丘、それがこのB小学校なのである。校長も言及するように、「学校は、子どもが主人公」であり、その子どもたちが「生き生きとして、主体的に意欲的に活動できるように支援していくことが教師の使命である」。そのため、学校として以下の経営方針が立てられている(収集資料)。

何よりも、児童にとって魅力があり、生き生きと学校生活を送れる教育環境、教育活動を創造することに努め、児童一人ひとりの活力を引き出す学校づくり、学級づくりを推進する。

人間尊重の精神を基底に据え、どの子も生かされ、学ぶことの喜びが感じられる学校づくり、授業づくりを目指す。

児童一人ひとりの「よさ」を生かし、自ら学ぶ意欲と思考力、判断力、表現力を育てることを重視した学力観に立ち、基礎、基本の定着を図るとともに、創造性豊かな児童の育成を目指す。

児童の創造性と主体的な行動力を育てるため、学級活動、児童会活動の充実を図るとともに、所属感や成就感の感じられる学校行事の創造に努める。

児童同士、教師と児童の人間関係を深め、児童一人ひとりの内面にまで踏み込んだ児童理解に努め、児童の自主性、自立性を育てる。

こうした新しい学校、教育を実現するため、全教職員が公教育の担い手であるとの自覚に立ち、また、本学の歴史を創る大きな使命を持つことを肝に命じ、研修に努め、開かれた議論の中で共通の理解を図り、協力体制を確立して、保護者や地域に信頼される学校づくりを目指して努力する。

(5) 教育課程及び学校内部組織の運営方法

次年度の教育課程や分掌構成や内容は、前年度の3月までに決めるようにしている。それらは、外部評価と内部評価に基づいて、旧担当者の教員が新たに内容を加筆・修正して職員会議に提案し、方向づけられる。多くの学校の各種委員会の決定方法では、前例に頼ることが多いが、この学校では、常に子どもの育ちの様子を見ながら、臨機応変に、分掌

の担当者からの意見を尊重して、その内容の更新等を決定している。

(6) 運営管理

人事管理面では、適材適所で、教員の個性や能力を生かすことを大切にしている。そこでの校長の役割は、教員が責任をもって自分の仕事ができるように条件を整えることである。教員が責任をもって行う仕事に対しては、できる限り尊重する。

危機管理面では、保護者と一体になって行い、問題が起これば即座に対応することが基本である。緊急時にはすぐに保護者に文書を出して協力してもらい、場合によっては保護者に子どもを引き渡すこともある。校門の施錠は来校者が多いため難しいが、常に校門を閉めるようにしている。

(7) 教育委員会との関係

研究指定は、学校が受け身になるのではなく、その学校が自発的に教育課題に取り組もうとする意思を尊重して教育委員会が認定する。授業の研究発表会を開催すると多くの費用がかかるため、教育委員会に財政面での支援を受けている。

3. 学校改革に向けた特色ある取り組み

(1) 学習指導要領の改訂と学校改善計画の実施

現在の校長は3代目校長であり、校長に就任してから5年目になる。校長は新学習指導要領の改訂を契機に学校パラダイムの転換をどう図るかという課題に対して、平成12年度から平成14年度の完全実施までの3年間に、この小学校の「教育課程」、「教科・総合」、「評価」、「開かれた学校」について独自の改善計画を立てて実行した（学校の改善計画は、別途表示した。収集資料）。

平成12年度から、この学校の取り組み課題を抽出するという作業を始め、学習指導要領の改訂に伴う移行と学校改革を同時並行で進めていった。そのうち、「教育課程」の見直しについては、学習指導要領に示された授業時間数を確保し、子どもの基礎学力の充実を図るために、授業時間を従来の45分授業を1日5～6時間とするシステムから、3ブロック制に改め、1ブロックを90分、2ブロックを95分、3ブロックを月～水は60分、木～金は90分の授業を行うこととした。これにより、1回のブロックの中に「30分の授業を3教科行う」等の弾力的な運用が可能になった。また、朝の会に「ぐんぐんタイム」を設け、漢字の書き取り、計算演習、音楽会に向けた合唱の練習など担任裁量の時間とした。ただし、この「ぐんぐんタイム」は授業時間数に含めていない。それでも、1週間の時間割で28時間の確保に成功した（時程表は別途表示した。収集資料）。

また、基礎基本の徹底と分かる授業の充実を目指すために、各教科の教育方法の改善工夫に着手した。まず、目標と評価と指導の一体化を図るために、新たに指導案を開発した。そして、年間の各教科ならびに総合的な学習の時間に関するカリキュラム上の評価規準をすべて明示した。さらに、3名の加配教員を生かして、高学年には教科担任制（6年生）と少人数指導（6年生、5年生）を導入し、子どもの個性化・個別化への対応と中学校での学習に円滑に移行できるよう配慮した。逆に低学年（1年生）には国語と生活科に

を職員会議に諮っても即答ができないため、再度それを部会に差し戻して考えをとりまとめ、もう一度職員会議に諮るということが何度も繰り返されてきた。この運営方法では決定までに時間がかかり、大規模校では部会の数も多いことから、学校が置かれた状況に即応できないという限界があった。

そこで、従来のように各部会に提案権を持たせるのではなく、分掌の担当者に提案権を持たせ、職員会議で出された意見等を担当者の判断で取り入れたり、即答したりできるように変えた。つまり、学校内部組織の責任の所在を個人にし、個人の責任において職員会議に提案できるようにしたのである。そうすることで、職員会議での決定が早くなり、学校改革も円滑に進むようになった。

また、提案内容については、事前に校長又は教頭と担当者間で打ち合わせを行い、最終的に校長の了承を得るようにしている。しかし、校長が全てを独断で決めるのではなく、全教員が納得できるように、できる限り担当者から案を提出させ、話し合いの上で了承するという方法を採用している。

(3) 教員の説明責任能力を育む「一人1研究」

この学校の改善の柱の一つは、教員による授業の研究である。なぜ授業の研究に重点を置くのかと言えば、授業の基本として教育課程や年間計画はあっても、自分の学級の子どもたちの教育については全て担任に責任があるため、担任は自分の学級の子どもたちをどのように育てたいのかという説明責任を果たさなければならないからである。その説明責任を果たすための力量が教員に求められる。そこで、この学校では、1年間を通して、子ども一人ひとりをどのように育てたいのかという課題をもって「一人1研究」方式の授業の研究を行っている(8月に中間発表、1月に最終まとめ、翌年4月に次年度の研究の方向性を教員に示させる)。

この「一人1研究」という研修方式を採用したのは、教員一人ひとりが子どもの教育に対して説明責任を負っていることを自覚させるためである。その自覚が教員の一人立ちへと繋がっていくと考えられている。

これまで行われてきた公開授業では護送船団方式で、その学年の誰が書いたのか分からない指導案で代表の教員が授業をするため、教員一人ひとりに授業実践力がつきにくいという問題があった。しかしながら、教員一人ひとりが責任をもって指導案を書き、自分なりの子どもの捉え方や教材解釈で授業を行って得た成果は非常に大きい。

参観日や授業研究発表会がある時には、全教室で行われる授業内容を一覧表にして保護者に連絡している。当日は、各学級の担任の指導案(略案)を拡大紙で教室の前に掲示する。保護者は各教室の前に掲示された指導案を見ながら授業を参観できるので、最近では保護者の授業を見る目が育ってきたと校長は指摘する。そうした試みによって、保護者の授業に対する意見が以前とはかなり違ってきており、その意見を外部評価として各教員の授業改善に反映させている。「教員が育つ学校でなければ、子どもは育たない」し、「教員が学んでいかなければ、子どもも学ばない」のである。保護者による外部評価を絶えず意識して授業改善に努めている教員は、毎日夜遅くまで授業の研究を行っている。

(4) 学校の情報誌の発行

この学校では県下でも珍しく学校の情報誌を年4～5回発行しており、学校だよりに関しては毎月1回発行している。この情報誌や学校だよりには、学校の子どもの様子とともに、必ず校長の巻頭言が掲載される。校長が日頃学校や子どもたちの様子を見ながら気づいたことや感じたことなどが綴られており、保護者も熱心に校長の文章を読んでいく。その効果として、校長の意向が以前よりも理解されるようになり、校長がどういふことに価値を置いているのかが教員のみならず保護者にも伝わるようになってきた。校長は、そうした自分の価値観が教員だけでなく、広く保護者にも浸透していくことの大切さを強調する。というのは、ややもすれば校長の考えは巻頭言として掲載されても、発信のみに終始する傾向にあるからである。しかし、この小学校の校長は、単に校長の考えを発信するだけでなく、それに対する感想や意見を保護者に求めている。その結果、情報誌に対して保護者からの沢山の感想や意見が寄せられており、その内容は次号の情報誌に掲載されることになっている（情報誌に掲載された「保護者からの声」を別途表示した。収集資料）。そうした外部との双方向のやりとりが、開かれた学校経営には必要なのである。

B小情報誌「かがやけビーミーっ子」第5号
「読者カード」でよせられた保護者の声

【学校のめざすものがよく分かった】

○学校がどのような理念をかかげ、児童にあっているのかが分かり、参考になりました。子どもからは伝わってこない学校の情報が載っていて興味深く、充実した内容でした。

○毎週、興味深く読ませて頂いています。今年度の小学校の方針等、すごく参考になることが書かれていて、子どもたちがいかに熱心で愛情のある先生方でめざされたか、本当に B小学校の字どもたちはラッキーですね。

○学校と先生方の目指しているところがよく解り、毎号楽しみにしています。先生方もお忙しいでしょうが、こうして記事を書いてくださること、本当に感謝しています。

○いつも楽しく読ませて頂いています。学校の方針や子どもたちの様子がわかり、とてもよいと思います。

○毎号楽しみに読ませて頂いております。校長先生の巻頭の言葉は B小学校のめざす教育がどんなものであるか推し示すものであり、信頼できる学校であることをうれしく思います。お忙しい中、執筆された先生の熱意、情熱にも感謝の気持ちでいっぱいです。

○ B小全体の様子が本当によく分かる冊子に編集されています。明るく、そして自ら学ぶという基本的なことが大切であると同感です。今後情報誌の発行、期待しております。

【学校の取組みがよく分かった】

○親も子ども初めての小学校生活が始まり、まだよく理解できない時にこのような情報誌をいただき、学校のことがよく理解でき、大いに助かりました。教育活動や具体的な取り組みなど、詳細に書かれているので、大変興味深く読ませていただきました。

○いろいろな人の目を通して学校の様子を知る

ことができた。全体を通して見ると、学校の全体像と子どもたちの顔が見えてくるように感じた。

○とても興味深く読ませていただきました。学校での取組み、子どもたちの様子など先生の頑張りを読むことができました。

○毎号楽しみにしています。学校の様子分かることは親としてとても心強いので助かっています。編集等とてもたいへんな作業と思いますがこれからも楽しみにしています。

○各分野ごとに目標をたて、それに向けての実践取組について興味深く読ませていただきました。一人ひとりの先生方が研究テーマをもち、前向きにがんばっている姿を感じます。

【学校と保護者・地域との連携を深めるため】

○とても失礼な言い方ですが、正直に言って公立の小学校にこれほどの熱意や愛情ある教育を期待していませんでした。ただ偶然と昨今の教師の不祥事のニュースや「ゆとり教育」の影響を耳にして、そういう先入観を抱いていました。この冊子を手にして、そういう気持ちも払拭されることと共に、先生方に願がさがり、親も改めて襟を正さねば、という気持ちになります。大切なのは、学校任せにせず、各々の家庭が、一つの家庭も残さず、地域で深く意識して子どもたちを見守ることだと感じました。「地域ぐるみの教育」に対する取り組みが、この冊子を通して、より広く深く理解されることよいと思います。ありがとうございます。

○学校全体としての取り組みや姿勢を知ることができました。いつもながらゆりの先生方の熱心さに感謝。保護者としてさらに地域の一員として学校との関わりをあらためて考える一冊でした。

○親も子どもまだまだ学校生活は手探りの状態ですが、本誌を読ませていただくことで親として学校生活を充実させるようにすべきことや方向性

が少し分かった様な気がしていました。

○まだ手のかかる生徒実況がある為、学校の行事に参加しても集中できないが、これを読むと方針がよく分かり、よかったです。

○こんな内容の濃い、読み応えのある情報誌をこれら時々読むことができると思うと、たいへん楽しみです。言葉にすることで自身の気持ちも改められ、たくさんの人たちの思いを目にすると、さらに意欲の向上につながります。 B小学校の教師の皆さんと保護者のみなさんが一つになって、心と心の通い合う温かい学校、町になっていくことを心から願います。

【巻頭論文「根を養えば樹は自然から育つ」について】

○毎日内容の濃さに重みを感じながら時間をかけて読んでいます。今回は「読書を立てる」につきます。読みながら、背筋が引き締まる思いがしました。なるほどと思いつつも、いついつ子どもたちに「読書〜!!」と感嘆している自分が情けないです。校長先生の「そっと背筋をさすり、ニコリ」というところを愛を感じました。

○校長先生の巻頭論文の中にありました「子どもの方信じて待つ」という言葉。これからの子育ての中で常に心にためていたいと思ってしまう。日々の生活の中で、目に見える部分での子どもの成長だけではなく、目に見えない育ち（根つき）にしっかりと寄り添い、根を伸ばすことと必要なたまごを育てることの出来る。そしてどんな花が咲くのか心待ちにできる親になりたいと思えました。親として、とても深く考えることのできる論文をありがとうございます。

B小学校の先生方の目指す子ども像へ向けてのきめ細やかな取り組みを讀ませていただき感謝の気持ちでいっぱいです。

○巻頭論文、いつも楽しみにしております。「主婦」という肩書きのない生活の中で、いつの間にか読書を読めることなど忘れていました。心静かに、読書を読めることなど改めてみると、何か新しいことを始めてみようかという気持ちになってきます。子どもより、まず私自身、日々の生活をただしていかなければと感じました。

○「根を養えば樹は自然から育つ」を拝読しながら思わず背筋が伸びている自分に気づきました。愛情も物も言葉も適当なときに適度に必要だと

分かっているつもりですが、その適当と適度が大変難しい課題です。ずっと自分自身に問い続けていくことになりそうです。

それから今回は、教科だけでなく生活面においても素晴らしい活動をして下さっている事を改めて知る機会となりました。

○読書を読めることを意識した教育は、今、必要かもしれないと思えました。我が子も文字を書く姿勢や鉛筆の持ち方ができてなくて、とても気にしています。何事も基本が大切ということだと感じました。

○毎回来しみにしていますが、今回は巻頭論文は大変興味深く、我が子の子育てをもう一度考えてみるよい機会になりました。あれこれ口やかましく言い過ぎている自分に反省し、冬の寒さに耐え、しっかりと根をはった樹のような子どもに育てていかなければ、その為にはもっと自分が成長しなければということを考えさせられました。

○長女の娘にはかわいさの余り、手をかけすぎて自主性を損なってしまったと感じていたので、校長先生の巻頭論文を興味深く読ませて頂きました。子どもを信じて小言を減らし、窮の通ったたくましい子になって欲しいと心から思いました。

○子どもが大きくなるにつれ、学校とも疎遠になってきてしまいましたが、学校生活の様子がよくわかりました。

毎日忙しく過ぎていく中、校長先生のお話を読んで子育てについてもう一度考えさせられました。ありがとうございます。

○校長先生のメッセージはいつも楽しみに読ませていただいています。自分を振り返り、生活に反映できたらいいと思います。また、4号はただいでありながら忙しさに追いついて読んでいませんでした。が読者カードの管理の意見を見て、すぐに出してきてよ興味深く読ませていただきました。

○校長の C 先生の巻頭論文は、毎回引きつけられる内容ばかりで楽しみにさせていただいております。子育ての中で大事な事を教えていただき、親の私も勉強させていただいております。次回も楽しみにします。グラビアも子どもたちの姿が見られ、楽しくみさせていただきました。

○校長先生の巻頭論文興味深く読ませていただき

(5) 学校評価システムの導入

上に述べた情報誌による保護者とのやりとりの元々の起源は、3年前に始まった学校評価にあった。この学校が学校評価に取り組んだのは、「総合的な学習の時間」の中に英語活動という新しい内容を取り入れる際に、教員の間から反発が起こったため、保護者のニーズを把握する必要があるからである。そのほかにも、今の子どもたちは挨拶ができないという問題に対して、実際に保護者が日頃どのように感じているのかを尋ねてみる必要

があったからである。その3年前のアンケート調査を分析した結果、保護者の8割以上が英語活動の導入に賛成であった。また挨拶については、家庭でも行う必要があるという回答が多かった。このアンケートの結果より、保護者からの英語活動のニーズが高かったため、教員も納得し、「総合的な学習の時間」の中に英語活動を取り入れて教育課程を編成せざるを得なくなった。その結果、年々時数を増やし、「総合的な学習の時間」の中の20時間を英語活動に割り当てるようになった。

このノウハウを生かし、その後の2年間、保護者に学校評価のアンケートを実施してきた(保護者による学校評価アンケートの結果の一部を別途表示した。収集資料)。保護者のアンケートは必ず年度内に分析し、その結果について考察を加え、来年度に向けての学校の取り組み課題を策定する。例えば、「英語活動を強化する」とか「清掃活動をもっときちんとさせる」など、その課題が来年度の重点課題となる。このように学校評価システムがうまく機能し始めたのが、最近の2年間である。この学校評価システムの導入に際して、教員に外部評価の重要性を認識させるのに2年間を要した。

この学校評価で最も重要なことは、どのような内容のアンケートを実施するかである。アンケートを実施するとき、そのアンケートの内容が学校改善を行う上で役に立たなければ意味がない。そこで、アンケートの作成過程において教務担当が作成した案で納得できない部分があった場合、校長が意見を述べてその内容についてかなり検討したという。そうした検討の中で、外部の人々とどのように関わっていけばよいのかを学び、教員は成長する。そして、このアンケートをどのように分析し、その結果を教育課程等にどう反映させるかを校長と教員が共に考えることによって校長の意向が教員に浸透していくのである。

①保護者アンケート(担当者…)

B小学校の子どもたちのより良き育ちのために
～保護者・児童アンケートの結果から～

B小学校は、家庭や地域との連携をはかりながら、地域住民から信頼される学校づくりを進めています。B小学校の教育実践についてその経過と成果・課題を明らかにしながら、教職員・保護者・地域間における活発な意見交流が必要だと考えています。

今まで、学校の教育実践に対する評価と言えば「教師自身による」評価が中心でした。しかし、教育に対する多様なニーズが求められている今、教師だけではなく、児童・保護者そして地域の方々にも学校の教育実践を評価していただくと考えました。

そのような経過の中で、本校の教育活動を見直し、より良いものにしていくための1つの取り組みとして、昨年度末(2002年2月)に初めて保護者を対象とした「学校評価アンケート」を実施しました。

学校の教育活動は、
PLAN(計画) ⇒ DO(実践) ⇒ CHECK(評価) ⇒ ACTION(改善)

というサイクルで基本的には回っています。このサイクルの中で重要な部分は、CHECK(評価) ⇒ ACTION(改善)の部分です。昨年度実施したアンケートの結果をふまえ、「あいさつ運動の推進」「清掃活動の徹底」などを本年度(2003年度)の本校教育の重点課題としたわけです。

今回実施した2回目の「学校評価(保護者)アンケート」についても、昨年度のデータとの比較検討をしながら、この1年の教育活動の点検を行いました。アンケートにご協力下さいました皆様改めて感謝いたします。

アンケートの実施状況については下記の通りです。それぞれの設問ごとに有効回答についてデータを整理しました。また、それぞれの分析については、各ページの【解説】をお読みください。

今回のアンケートで寄せられた貴重な声ができる限り本校教育に生かされ、「より良きB小学校の子どもたちの育ち」の一助になれば幸いです。

これからも本校教育に対するご協力・ご支援よろしくお願い申し上げます。

☆保護者アンケート回収状況(2003年12月実施)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全校生
在籍数	145	151	183	166	208	186	1039
回収数	133	144	167	158	176	153	931
回収率	92%	95%	91%	95%	85%	82%	90%
家数対象 集回数	130	134	155	120	112	80	731

☆児童用アンケート回収状況(2003年12月実施)

	3年	4年	5年	6年	合計
在籍数	183	166	208	186	743
回収数	183	164	199	177	723
回収率	100%	99%	96%	95%	97%

(文責 校長、教育課程)

4.「楽しく」「よくわかる」学習をめざして～教科学習と読書～(設問⑦～⑨)

設問⑦、家庭でよく話題になる教科

設問⑧の1、読書時間の増減

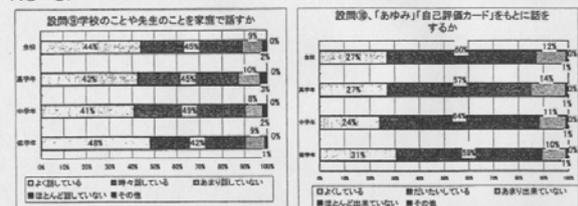
設問⑧の2、読書時間の増加は何の影響によるものか

【解説】
設問⑦においてまず気づくことは、国語・算数についてはどの学年でも「よく話題になっている」ということである。基本的な学習の力を、国算でみる傾向が強いと考えられるだろう。2つ目は、体育がどの学年でもよく話題になっているということである。児童は基本的に体を動かす事(運動)が好きである。さらに、「できる・できない」が見えてははっきりしていることにより、達成感や課題意識が持ちやすいものと思われる。3つ目は、学団ごとの特徴である。つまり3・4年では「総合」が、5・6年では「家庭」の割合が高い。これは、新しく学習する教科・学習への関心のあらわれであろう。最後に6年で「社会」が高くなっているのは、「歴史」学習に高い関心が寄せられているためと考えられる。発達段階にマッチした学習であり、発展や深まりに応たいものである。

なお、この設問については、昨年度「子どもが楽しいと言っている教科は…」という聞き方をしており、昨年度よりは今年度の方が分析しやすかった。アンケートの項目として、どのような尋ね方をすればいいのか、この項目だけではなく、こうしたアンケートを継続する中でさらに吟味を重ねたいと考えている。

設問⑧では、読書時間について調査した。これは今年をはじめ入れた項目である。その結果、「ア、とてもふえた」「イ、少しふえた」を合わせた割合が、「エ、以前よりへった」をどの学年においても上回った。また、読書時間がふえた理由として、「10分間読書」を挙げている保護者が一番多かった。自由記述においても「10分間読書」を評価する声が多く、これからも続けていきたい。「10分間読書」については、2000年度に取り組みを開始し、2001～3年度の3年間については、全学年において実施した。教育の効果は、短時間で表れるものではない。息の長い取り組みが継続されてこそ子どもたちの力は育まれるのである。

5. 楽しさを感じ、はげましの得られる語り合いを～生活や学習を家庭でも話題に～（設問⑨～⑩）



【解説】

設問⑨では、「ア、よく話している」「イ、時々話している」を合わせるとどの学年でも約90%になり、昨年度に引き続き親子で学校生活についてよく語り合われていることがわかる。小さい頃から友だちのこと、先生のこと、学校での出来事、明るい雰囲気でも語り合うことにより、親子の絆を強めてほしいと願っている。

設問⑩においても、アとイの合計が86～91%と高い水準を示した。自己評価カードの保護者のコメントも学習の過程を理解したものが多く、高い関心を寄せていただいていることがわかる。その励みや賞賛が、子どもの意欲に深くかわかり、支えていただいていることを感じ、ありがたく思う。次のようなコメントをもらえた時、子どもたちは自分の取り組みに満足し、価値を見出していくのであろう。

「英語活動」では、はずかしがらずに声を出して買い物ができましたね。困った時は友達に相談できましたね。楽しそうにやり通していたので安心しました。「人にやさしい町づくり」では車いすのことに本をさがしたり、町調査しましたね。自分でもできることを見つける努力をこれからも忘れないでほしいです。

家庭と学校の双方が、しっかり手を携えてこそ子どもはよく育つ。

10. 来年度はこんな事を取り組みます～まとめとして～

- ①「教師の意識・姿勢」「10分間読書」「1人一研究」「5年生の少人数学習」「6年生の教科担任制」「社会体育への積極的な参加」などについてはプラス評価の声が多数寄せられた。教科学習・総合学習および行事を通して、「話す力」「文章を書く力」「聞く力」などが児童に十分ついているとも評価いただいている。私たち教職員の励みにしたい。
- ②「あいさつ」「清掃」については、本年度重点課題として取り組み、ある程度の成果は見られた。ただ、清掃特に「トイレ」については、「まだ不十分」という声が多く寄せられた。児童数に対してトイレの数が少なすぎること、家庭ではほとんど「洋式」であるのに、学校では「和式」で慣れないことなど、清掃以外の要因も考えられる。清掃指導と共にトイレの使い方の指導も強化・徹底していきたいと思う。
- ③保護者が学校に来る機会が多いことについては、「学校のことがよくわかる」という声がある反面、「仕事などの関係で負担に感じる」という声もあった。「いつでも、無理なく」を心がけながら、時期や内容などをよく検討し、より保護者の理解を得たいと考えている。
- ④学校行事・総合学習を評価する反面、それに時間をとられて基礎的な学習の時間と内容の定着について不安視する声が多く見られた。これについては、指導計画に基づき、その範囲内での増減はあるものの各教科の定められた時間数の確保はできているので、ご安心願いたい。

ちなみに、今年一学期に3年生以上で実施した文部科学省所管の「総合初等教育研究所」の漢字力定着テストによると、全ての学年において全国平均を上回る結果を得られた。これは学力のほんの一部にすぎないが、心強い結果である。

さらに計算力等にも広げて、各学期ごとに本校独自の定着度テストを行い、児童のつまずきを早期発見し指導に生かしたいと考えている。これは、各担任が従来から行ってきたことであるので、その内容や成果を学校として共有し、必要に応じて個別指導や長期休業中の補充学習につなげていきたい。

（6）複眼的評価を取り入れた通知票の導入

この学校の通知票は、3年前に内容が変わった。通知票では、子どもたちが色々な人の視点から評価してもらえるように「複眼的評価」を取り入れた。

この学校の通知票は、担任が書いた所見と、子どもが書いた自己評価カードを一緒にして保護者に渡すようにしている。自己評価カードには、「自分から進んで活動できたか」という問いに対して、子どもが「いろいろな意見を聞いて発表できた」等を記入し、その学習に対する自分の満足度を100パーセントで表す。その満足度が低い子どもは、その理由も書くようになっている。このように、担任の所見と子どもの自己評価を見れば、保護者に対してかなりの説明ができるようになる。さらに、子どもはポートフォリオも持って帰るため、保護者はこれによって子どもの学びの姿が把握できるようになっている。

また、この通知票のもう一つの特徴は、通知票を見た保護者が、その内容について返事を書くようになっていることである。このように、子どもは教員や親から複眼的に評価され、進むべき今後の方向性を得ながら、学びが促進されるのである。

ところで、校長は全ての学級の通知票に目を通し、担任の所見欄の内容を評価し、そのコメントを担任に返すようにしている。校長が強調するように、通知票の所見には、子どもの姿が浮かんでくるような書き方が求められる。

そこで、夏休みのある半日をかけて、各自が自選した無記名の通知票の所見を集め、教員全員で読み合い、それについて各自が良いと思うものを選び意見交流する。そうすることによって、通知票の所見に対する評価の観点が明らかになり、徐々に教員の所見の中身も向上する。このような教員間の意見交流が、教員の力量形成に繋がっていく。つまり、教員相互の学び合いによって、教員の子どもの見る視点が変わってくるのである。

（7）地域・保護者との連携による学校づくり

今年度より、校務分掌に「地域人材開発」という担当が新たに設けられた。この担当の教員は、過去のPTAの人たちとの窓口になったり、この学校のお茶クラブや手話クラブで指導して頂く地域の人たちとの窓口になる。この担当者は、そうした地域の人々や保護者に学校のあらゆる活動に関わって、協力してもらうための窓口なのである。

例えば、音楽活動に地域の方で音楽を専門にしている人を呼んで指導してもらったり、クラブ活動や教科・総合の授業に地域の専門家に入ってもらうこともある。このような地域の専門家の支援を得ながら、この学校の教育活動は展開されている。

また、この学校では、評価活動を意識した授業を重視している。そのために、複眼的評価、すなわち、ポートフォリオ評価、教員からの評価、子ども同士の評価、保護者からの評価など様々な立場からみた評価を取り入れていくことを大切にしている。例えば、国語の音読発表会では、学級単位で各家庭に案内を出して保護者に来校してもらい、評価してもらっている。このように、教育の中に保護者からの評価活動を積極的に取り入れることで、保護者に学校や教育課程について理解してもらえるようになった。最近では、教員も外部から教育活動を評価されることに抵抗がなくなってきた。

4. 学校改革を成功に導いた要因

(1) 見本となる教員の存在

学校文化を創造する上で不可欠なことは、「教員が子どもたちをどういうふうな子どもに育てていけばよいのかを考えると、生き生きとした望ましい子どもの姿を間近で見ることができることである」と校長は指摘する。この学校にも、生き生きとした子どもの姿を周囲の教員に見せることができる「核となる教員」が何人かいる。そうした授業を熱心に研究している「核となる教員」を各学年に配置し、その教員のもつ価値を校長が尊ぶことが大切である。つまり、この学校の教員を引っ張っていく、そうした見本となる教員が学校改革には必要なのである。

例えば、この学校の校長は卒業間近に6年生の全ての学級で授業を行うが、そのときに子どもの育ちが見える学級とそうでない学級とでは大きな違いがある。よく子どもが育っている学級で授業をすると必ず子どもと感動が共有できると校長は言う。1年生が1年生として、2年生が2年生として精一杯育っているかどうかは校長の担任に対する評価基準になっている。

したがって、学校や学年の中に自分が目指そうとする学級の姿があることは、担任が自分の学級の子どものどのような子どもに育てていきたいかというビジョンを形成する上で非常に重要であり、学校改革には欠かせない要素である。

(2) 学校を保護者・地域に開いたこと

つぎに、この学校の改革が成功した最も大きな要因は、校長が学校評価を導入したことによって、学校に対する保護者・地域の人々からの理解が以前よりも得られるようになったことである。また、保護者に学校評価のアンケートに回答してもらうことによって、今後学校がすべきことと家庭がすべきことが明確になってきたことも要因として考えられる。特にこの学校では、保護者のアンケートの結果から学校における取り組み課題を抽出

し、それを次年度の重点課題として明文化できるようになった。そのため、教員は自分が好む好まないに関係なく、目標達成に向けて努力しなければならなくなった。

これまでは、どちらかと言えば、教員が主体となって学級の中の子どもたちを教育し、評価すればよいとされてきたが、この学校のように教員自身が評価される対象となり、自分の教室の中に閉じこめていたものをオープンにすることによって、学校として当たり前のことを当たり前にできないといけなくなった。そして、教員一人ひとりに、子どもの育ちに対する説明責任を果たせるだけの力量も求められるようになった。特に、「一人1研究」が行われるようになったのは、一人ひとりの教員が自分の担当する子どもたちの育ちに責任を持たなければならないからである。その責任を自覚させるためには、学校をオープンにし、保護者・地域の方々に授業での子どもたちの様子を見てもらい、そこから授業の中で展開される教育の質を複眼的に評価してもらうことが必要なのである。そうした様々な角度からの評価活動が教員の意識変革を促すのである。

また、保護者や地域の専門家の方々にも学校行事、クラブ活動、教科の授業などに指導者として、あるいはボランティアとして参加してもらい、学校と地域と保護者が一体となって子どもの教育にあたっていることを情報誌で校外へと発信している。そうすることで、保護者や地域の方々との協力関係もより強固なものになっている。

(3) 「子どもの育ち」を最優先する校長の教育理念の浸透

学校改革で不可欠な要素は、校長の学校経営に対するビジョンないし経営理念である。この学校の校長は、「学校経営で一番大切なことは、子どもを変えることである」と主張する。つまり、子どもを変えれば、保護者はその学校の教育を支持するようになり、自然と教員の団結心も生まれるようになる。だから、学校経営の基底は常に「子ども」でなくてはならない。学校経営では、子どもが変わっているか、子どもが育っているかという視点を常に持ち続けることが大切であると校長は指摘する。

ところが、そうした視点を教員一人ひとりが持っているかと言えば、実際の学校ではそうでない状況にある。校長は、教員に対して悪いと思ったことはその都度指摘し、教員が納得できるまで議論するようにしているが、常々校長は「子どもの生活と学びの姿は一つである」ことを教員に伝えている。それは、「日頃の授業や教育内容がしっかりとなされれば、自然と子どもの清掃活動や暮らしぶりもきちんとできるようになる。授業や特別活動と子どもの暮らしぶりは一体のものである」という考え方に基づいているからである。

そうした子どもの育ちを実現するためには、まず教員の子どもを観る目を育てていかなければならない。そのためには、教員による研修・研究を通じて、共通に子どもを見つめる目を育てながら、どういった子どもの姿が相応しいのか、本当に子どもが子どもらしく伸びるとはどういうことを指すのかについて教員相互の共通理解が求められる。そこで、この小学校では、校長のリーダーシップの下に、毎年、市教委からの指定を受けて授業の研究発表会を行っている。

今年度はその成果が各所に現れた。創立10周年の記念行事の企画をする際に、子どもの意見を取り入れてみてはどうかという意見をはじめ、様々なアイデアが今まで無関心であった教員から出て、それを一連の取り組みや冊子づくりに生かすことができた。その取り組みや冊子は、保護者や子どもから好評であった。また、式典の中で、子どもが学校へ

の思い入れを公表したり、歌声を披露したりする様子を見た来校者から「子どもがよく育っていますね」と子どもの姿を通した評価を得た。子どもの暗唱指導を担当した教員たちは、保護者や来賓の方々から「子どもの育ち」について高い評価が得られると、かなりの満足感を得る。数年前であれば何か新しいことをしようとするに猛反対していた教員でも、現状を変えていくことの苦勞を乗り越えた先のやりがいや満足感を知れば協力者となる。そして、「子どもの育ち」のために積極的な意見を出すようになった。そうした教員の姿は、校長の教育に対する価値が教員に共有され、浸透している表れであると考えられる。

5. 今後の展望と課題

最後に、このB小学校の今後の課題を示すことにする。

(1) 学校評価システムを核にした学校改革の継続

この学校では、各教員に対して「一人1研究」を課しており、教員一人ひとりの力量形成に関してかなりの成果が得られているように思われる。また、学校経営全体から考えてみても、校長の学校改善計画に基づいて保護者等からの外部評価を教員の授業実践力へと還元させるシステムが出来あがっている。したがって、今後校長が変わったり、教員の異動等により教員が入れ替わっても、学校評価システムと教員の授業実践力の向上を結びつけた学校改革を継続していけるような学校文化を作りあげることが必要である。

(2) 主任制による学年経営の機能強化

その一方で、学年経営という観点から、各学級経営を学年としてまとめていける学年主任の存在も必要である。校長も、学年主任がこの学校ではうまく機能していない面があると感じていた。しかし、その学年の各学級を全て同質のものにすることが学年経営ではない。各学級の個性はあっても、学年、学級の調和が保たれている状態が学年経営としても理想である。「核となる教員」を各学年のミドル・リーダーに位置づけ、各学級の課題を学年単位で検討できる個性ある学年経営を目指すことも今後の大切な方向性の一つである。

(3) 内部評価の公開

現在の学校評価システムは、アンケート調査を介して保護者等からの意見を収集し、教員一人ひとりが力量形成を図ることをねらいとしている。しかし、校長からも言及があったことだが、教員による内部評価を保護者に公表し、その内容について保護者の意見を聴取することによって内部評価と外部評価の結合を図っていくことも今後の課題である。

(4) 教員の授業研究の成果を問う子どもの授業評価の開発

既にこの小学校では子どもにもアンケートを実施し、学校評価の一つとして活用している。そうしたアンケートの実施は、高く評価されるべきである。しかし、子どもによる学校評価のうち、授業については教科ならびに総合的な学習の時間から「好きな学習」を選

択する総括的評価になっているため、この学校で実施されている「一人1研究」の成果が、日々の授業の中で子どもの学びにどう反映されているのかが見えにくくなっている。

そこで、子どもにとって1学期よりも2学期の方が授業が楽しく分かりやすくなったのか、また、2学期よりも3学期の方が授業が楽しく分かりやすくなったのか、というふうに教員の「一人1研究」の成果と連動させて子どもによる授業評価を行えば、教員の授業改善努力と子どもの学びを一体のものとして捉えることができるようになると思われる。そうした子どもによる授業評価の開発と実施を、上記の内部評価の公開と併せて検討する必要があるだろう。

(別窓淳二)